

寺山修司研究の現在

——没後 25 周年を経て——

堀 江 秀 史

はじめに

2008 年は、文学、演劇、映画等、様々な芸術ジャンルの垣根を超えて、縦横無尽の活躍を見せた寺山修司（1935－1983）の、没後 25 周年にあたる年であった。この年、秘書として長年寺山と共に過ごし、寺山没後これまで沈黙してきた田中未知が、寺山の未発表の歌集、写真集を編んだことにも窺えるように、25 年を経た現在も、寺山をとりまく状況は流動を続けているといえるが、その間にさまざまな研究が進められ、明らかになった部分も多くある。本論では、研究対象としては未だ「若い」寺山に対して、これまでどのような研究が進められてきたのかをまとめると同時に、今後どのような研究の方向性が考えられるのかを検討したい。

展覧会の成果

はじめに、展覧会がどのような成果をあげてきたかを見てみよう。

2008 年、青森県立美術館にて「土方巽と日本のアヴァンギャルド」展との併設で、「寺山修司 劇場美術館」展（4/1～5/11、郡山市立美術館へ巡回、9/13～10/19）が開催された。同館学芸員で、展覧会責任者を務めた工藤健志氏の語るところによれば、同展は、郷土出身者である寺山（青森県出身）と土方巽（秋田県出身）を同じ比重で縦軸に、1960～70 年代における同時代における人的な繋がりを横軸に据え、「資本主義という同一性」により、「地域性、固有性」が「徐々に失われ、価値までもが画一化する傾向にある」現代へのアンチテーゼを提示できるような空間を創出するべく、催された。つまり、とりたてて寺山没後 25 周年を意識したものではなかったのだが¹、展示物を提供する当事者たちの考えも絡み、土方展は寺山展との併催というかたちで別個の展覧会となり、結果として、没後 25 年という節目の年にふさわしく、1000 点超の展示数を誇る寺山展が中心的な役割を果たした²。

主催者側の意図もさることながら、この寺山展は過去最大の規模で、可能な限り寺山修司の活動の全体像を浮き彫りにしようとする、壮大な試みであった。周知の通り、寺山の活動は文芸のみならず、演劇、映画その他、多岐にわたるものであり、彼の活動の総体を把握し、全体として提示することは大きな困難を伴う。全体を伝えようとするあまり、生前、没後合わせ、同展開催時点までの寺山の著作を一堂に会して展示した「文学」ジャンルの展示の充実度に比して、「映画」、「音楽」といった各セクションに物足りなさが感じられましたが、ある程度の時間が経過した現段階で、没後の展開も含めた、寺山の総体を提示しようとした「寺山修司 劇場美術館」展の成果は、研究史上、高く評価すべきだろう。

そして、総体として寺山の活動を把握するという志と、先に述べた工藤氏の、同時代のパースペクティブを提示しようとする企図が見事に融合して、大きな成果を出したのが、他の作家との交流を意識的にまとめた部分、すなわち、同展カタログの末尾に収録された、寺山の生前、没後の著作を網羅した一覧である。この書誌情報の中には、その本に関わった人物も併記されている（例えば、書誌中の「1970年」の項には、「『ガリガリ博士の犯罪画帖』／戯曲／11月20日／新書館／装丁：榎本了壺／写真：篠山紀信＋萩原朔美／絵：渋川育由／190×190×11」といったように、装丁のみならず、本に載っている写真、絵などの情報を含めた、かなり詳細な記述が見られる）³。本を、その著者のみならず、モノ自体として見た総合的な立場からまとめ直していることがわかる。これによって、誰とどのような本を作ったのかが明らかにされ、寺山研究の視座はその分広がり、奥深くなった。

その他、今やカタログによってしか把握できないが、現在知り得る限りの展覧会等の展開を以下に記述してみよう。

青森県三沢市には寺山修司記念館がある。そこでは肉筆原稿や生前愛用した身の回りの品々などの資料を管理しつつ、寺山の総体を「謎」と「見る側の主体性」といった観点から構成した展示を行っており、テーマパークのように楽しみながら寺山の世界に触れることができる。この記念館のカタログともいえる『寺山修司記念館①』は、2000～2002年に国内各所で催された「寺山修司展 きらめく闇の宇宙」（以下「きらめく」展）のカタログも兼ねており、寺山が生きることのなかった21世紀に再度、彼を世に提示した営みの足跡でもある。豊富な写真資料で構成されたこのカタログもまた、重要な寺山の資料となっている。「きらめく」展は、開催された土地毎に異なった様相を呈していたそうであ

り⁴、札幌の北海道文学館は同展に際して、『寺山修司の21世紀』（2002）という独自のカタログを発行している。

2003年は没後20年にあたり、文学館が2館、展覧会を催した。世田谷文学館の「没後20年 寺山修司の青春時代」展と、青森近代文学館の「特別展 寺山修司——その人生は常に前衛であった——」である。両者とも、文学館という性質故、寺山の、主に自筆原稿や書簡などの資料を展示し、短歌、俳句などに力を注いだ中学～大学時代（入院、療養中）に焦点をあてた展覧会となっている⁵。世田谷文学館のカタログには、肉筆の原稿、はがきなどが、文字を識別できる形で掲載されており、没後20年を経て、1950年代までの、寺山の動向を知りうる資料が整ってきたことが分かる。

その5年後の2008年には、先述の青森県立美術館の展覧会に加え、同時期に青森県近代文学館が、「寺山修司 孤独な少年ジャーナリストからの出発」と題した展覧会を催した。短歌仲間の友人宛の葉書に加え、中学、高校時代の寺山が編集した新聞、雑誌、及び、寺山の短歌が掲載された雑誌が紹介されており、この展覧会によっても、短歌などの初出資料が整備されたといえる⁶。

以上のように、これまでの寺山の展覧会は、寺山の総体を提示するか、もしくは短歌、俳句などの「文学」に傾倒した10代の活動を提示するものであった。これら展覧会を経て、寺山は死後もその存在感を示し、今生きる人々の前に立ち現れるとともに、カタログが編纂されることで、研究上貴重な資料が整備されてきている。

単行本、雑誌特集の果たす役割

『寺山修司 劇場美術館』展カタログの書誌の成果を踏まえて、次に、寺山著作の膨大さを指摘しておきたい。同書誌によれば、寺山の著作は現在までに、共著、編著、翻訳や、改編、改版、新装版を含めると、372冊を数える。この量の多さは、寺山が生前に著した文の絶対量が多いこともあるが、彼の著作が再編、改版をなされ、多くの出版社から何度も発行されていることにも起因している。

寺山の「全集」は未だ発行されていない。全集編纂に向けての困難は、この量の多さの他にもあるだろう。そもそも初版単行本からして、雑誌等の初出情報を載せていないものが多いので、校訂に費やされる労力はかなりのものが予想されるし、菅野洋人氏が指摘するように⁷、寺山が本自体にもこだわりを示し、装丁、図像など、他のアーティストとのコラボレーションを以て、本が物体と

しても魅力をもつような作り方をしていることも、全集にするには扱いに困る点だといえるだろう。

ともあれ、こうした出版状況は、事情を複雑にする一方で、他方では、寺山を改めて別の角度から照射し直す試みでもあった。おそらく、寺山の死後、彼の文章を編纂した出版社の意図を探れば、編纂された数ほどの寺山像が浮かび上がることだろう。また、何度も装いを新たに発行していくことで、新しい読者を開拓することにも繋がった筈だ（寺山の読者に若者が多いと指摘されるゆえんは、作家としての資質からも論じうるが、こうした、何度も編み直されるという出版事情も加味する必要がある）。死後幾度も、形を変えて我々の前に現れる作家だということを、こうした出版事情は言外に物語っている。

さて、著者没後の再編単行本が新たな著者像を更新し、展覧会がモノ（美術品、物体としての本など）を中心に、寺山像を作り出すのだとすれば、雑誌特集もまた、ある方向性に沿った著者像を他者の言を用いて創出するもののだといえる。寺山没後、多くの雑誌が追悼特集を編んだ。こうした特集でとりわけ重要であったのは、寺山のジャンル横断に合わせて、様々な分野のプロが、彼の死に際して文章を寄せたことだろう⁸。特集に名を連ねる人物の名前からだけでも、寺山がいかに多くのジャンルを駆けていったのかが、窺い知れるのである。

ここまで、いわゆる「文学研究」とは離れた次元での、一般社会に於ける寺山の受容の様子を見てきたが、ここからは、単行本にて論じられる寺山について見ていこう。

寺山研究の動向

25年という歳月を経た上で、寺山論を概観すると、それが幾つかのカテゴリーに分けうるが見えてくる。即ち、「回想記」、「評伝」、「概説書」、「研究書」である。寺山「研究」について論じようとする今、おそらくこれらの内、「研究書」と見做されるものについて論ずべきであろうが、「回想記」、「評伝」は寺山の動向を把握する上でも重要なので、ここで一緒にまとめておきたい。

劇団を営んだ寺山は、必然的に深く関わりを持つ人が多い。先の4カテゴリーの内、「回想記」は、そうした人々（主に劇団関係者）が各々の観点から、自分と寺山を語る形のものだ。「評伝」は、生前さほど近しくもなかった人物が、周りの証言を集めつつ、寺山を再構築したもので、その分、寺山に近くで接した人々からすれば、誤解に思える記述も多い⁹。概して「回想記」が好意的であるのに対し、「評伝」は批判的に、寺山論を展開する¹⁰。こうした、人格を巡る記

述の難しさは、評伝、『寺山修司・遊戯の人』（新潮社、2000年）を著した杉山正樹の以下の文に表れている。

寺山修司は嘘つきだったし、覗き魔だった。[…] しかし、だからこそ、寺山修司は独自の世界を切りひらくことができたのだ。虚実一如。かれにとって、嘘が真実なのだった。覗きにも深い遠因があり、終始おなじ方法を貫いたので、世界のテラヤマにもなり得た。そのことを私は『寺山修司・遊戯の人』で実証しようと試みたのだった。／だが世の中には、嘘だの、覗きだの、盗作だのという単語を見ただけで、逆上する人たちがいる。神聖ニシテ犯スベカラズ。寺山修司は白い衣を着た永遠の教祖であり、讃辞あるいは頌歌のほかに聞く耳を持たないのだ。／没後二十年、その傾向はいよいよ高まっている。遊戯の人は天井桟敷から、片頬で笑って見てることだろう。ほんとならもう、とうに本質論が展開されてもいい時季なのに、と。"¹¹

「嘘」は「虚構」、「盗作」は「コラージュ」、「覗き」は「取材」もしくは「作家としての好奇心」、などと言い換えることで、かなりニュアンスを変えて読み手に伝えることができるわけだが、もちろんそうした言い換えによって失われる意味もある。ここで杉山は敢えて意図的に、挑発的、批判的な言葉を用いて、寺山の「本質」に迫ろうとした自著の正当性を語っている。だが、「本質論」というからには中立的な立場から判断を下さねばならぬ筈だが、そもそも「中立的」である為の拠り所となる「事実」が、各々の立ち位置からみた、しかも（いささか寺山が得意だったアフォリズムに似通った物言いになるが）、記憶という曖昧なものに基づいた「事実」の断片でしかないのだ。当然ながら、評伝も著者個々人による寺山「論」でしかないのである。「評伝」各著作と、それへの各方面からの反応から我々が学ぶべきは、我々のとるべき「人としての寺山」を知るための手立てが、これら著作を鵜呑みにするのではなく、様々な立場から記述された寺山を広く摂取し、また寺山の著作そのものに多く触れること以外にない、ということであろう。

ともかくも、こうした著作群によって、様々な寺山像が描かれると同時に、寺山の動向を把握するためのレファレンスが積み重なっていることは、確かである。

さて、寺山研究は、およそ20世紀の間は、劇団員ほど緊密ではないが、幾度

かともに仕事をしたことのある人々、主に三浦雅士、高取英などの人物によってなされてきた。これが、21世紀に入ってから、「寺山自身と面識のない人々が寺山論に取り組む」¹²ようになった。「記憶」ではなく「記録」として残されたものたちとの対話によって「寺山修司論」が展開されて行く¹³状況が生まれてきたのである。

2006年には、国際寺山修司学会が発足した。春秋で毎年2回開催されるこの学会は、春に行われた過去2回の学会に関しては、寺山の命日に合わせて青森にて開催されている。また、天井棧敷関係者などを招いての対談や、寺山戯曲の上演など、イベント的な彩りも添えられており、寺山学会ならではの、趣向を凝らした、娯楽性も備えたものとなっている。とはいえもちろん、研究発表の内容が疎かになっているわけではない。学者のみならず、建築家や医師も学会員として発表しており、個々の視点から、寺山を学際的に見つめ直す作業が行われている。こうした動きと単行本等による、研究の動向を概観すると、以下のように云えるであろう。

リアルタイムでの毀誉褒貶はともかく、生前より評価の高かった短詩型文学は、『全歌集』等と題して幾度か出版されており、資料的な整備が早く、様々な論が予ねてから展開されてきた。また、短歌、俳句に最も熱中した時期、10代の頃の伝記的、書誌的資料も1990年代に整備が進んだ。先述した2000年以降の文学館による展覧会も、この傾向に与している。つまり、短詩型文学に関する研究が、寺山研究の中で最も進んでいるのである。

一方、演劇、映画などの個々の作品を分析して寺山に迫ろうとする研究も多い。国際寺山学会で学会長を務める清水義和は、こうした分野の寺山作品と海外作家の作品を比較する論文を精力的に発表しているし、守安敏久は、主に映像作品の分析を多く為している。カリフォルニア大学のソーゲンフレイによって、2005年に上梓された、*Unspeakable Acts : The Avant-Garde Theatre of Terayama Shuji and Postwar Japan*が、演劇に関する研究書である事は、海外においても演劇分野が、研究者の興味を引いている事を示唆している。これは言い換えるなら、天井棧敷主催者としての寺山修司が、研究対象にされることが多いということである。

回想、評伝などによって、寺山の生涯の動向が各様の視点から明らかにされ、作品については、短詩型文学、演劇、映画等のジャンルの作品が多く分析されている。方法論の傾向は、学会結成をもって、ますます多様になってきているというのが、没後25年現在からみた寺山研究の状況である。

今後の課題

以上見てきた寺山研究の現状に照らして、今後進めるべき研究の方向性を示して、本論を締めくくりたい。

これまで進められてきた研究を、寺山の活動の時間軸に照らしてみると、詩人としての活動との関連から、1960年代前半以前の研究が、また、劇団での活動との関連から、1960年代後半以降の研究が充実していると云える。言い換えれば、主に小川太郎や小菅麻起子らによって資料整備の進められてきた少年期から青年期の、詩人としての寺山の活動（1950年代以前）と、1960年代後半以降の、劇団を率いての活動が、現在までにかなりの研究が蓄積されており、その2つの期間をつなぐ1950年代終わり～劇団結成までの研究がほとんどなされていないのである。これをおおまかに「1960年代」と呼べば、その頃、寺山が個人として様々なジャンルで行った仕事はいかなるものであったのが、それ以外の時代の活動における研究の充実に比して、いまだ解明されていない部分が多いのである。

1960年代に関しては、現在までのところ、以下の幾つかの文献が参照できる。

一次文献としては、その内容の真偽はさておきにせよ、寺山の自伝『誰か故郷を想はざる』（芳賀書店、1968）及び、「誰か故郷を想はざる」という少年時代の終わったところからはじめて、「歌のわかれ」をるところまで」¹⁴と寺山自ら記す、「消しゴム」（『黄金時代』所収）があり、この頃の動向が書かれている。また、演劇、ラジオドラマ、テレビドラマ、映画などの脚本に関しては、『寺山修司の戯曲』（9巻まで、思潮社、1983～1987）および、『寺山修司全シナリオ』（Ⅰ～Ⅱ巻、フィルムアート社、1993）、山田太一編『ジオノ・飛ばなかった男』（筑摩書房、1994）などにまとまっているが、これ以降に発見された作品もあるため、注意を要する。

また、60年代、寺山が劇団を率いる以前、一人で活動していた時期における彼の事実関係をまとめた論としては、以下2冊の評伝が挙げられる。一つは、仕事を通じて関わった人物、とりわけラジオ、テレビ業界の人々の説明も詳しく、同時代の人的な横の広がりを知ることのできる、田澤拓也著『虚人 寺山修司伝』であり、もう一つは、60年代の政治思想的背景を絡めて論じられており、時代の空気と共に寺山を知ることができる、長尾三郎著『虚構地獄 寺山修司』である。これら2作品は、寺山作品及び人格に関して批判的な表現もまま見られ、寺山関係者には好意的に受け入れられているとは言い難いが、寺山の作品に直

に触れ、かつその他の、寺山と直接に関わった人々の言にも耳を傾け、その評価を他人に委ねずに判断するならば、「記憶」でなく「記録」でしか寺山及びその時代を知ることのできない現在に生きる我々にとって、貴重な資料を豊富に提供してくれるものである。

その他、60年代を含めた通史としては、『新潮日本文学アルバム 56 寺山修司』(1993)、『寺山修司 劇場美術館』展カタログ(2008)末尾の年譜など、この頃の活動を把握する為の資料は様々に存在する。

しかし、出生～高校まで、初期の俳句、短歌を作っていた頃の研究の充実¹⁵及び、70年代以降、劇団結成により彼を直接知る人物が多くなり、証言も揃ってくる時期に比して、単独で非常に多様な展開を見せる60年代は、上記挙げた資料を参考にしようとする、それぞれに何らかの手落ちがあり、照らし合わせて「正確な」情報を「作って」いくより手だてがない。

こうした状況は、寺山が多産な作家で、多様な雑誌に文章を寄せたり取材を受けたりしていた、という理由の他、50年代末以降、寺山がラジオ、テレビなど、アーカイブズを整備することの難しいメディアに作品を発表したり(とりわけテレビは、当時未だ黎明期で、大量のドラマを生放送で放映していた)、また、寺山自身が電波にのってコメンテーターとして登場していたこと、つまり、資料的な裏付けが困難なメディアでの活動が招いているといえる(よって、田澤拓也『虚人 寺山修司』は、かなり意地悪い見方とはいえ、テレビ、ラジオ業界の人々へのインタビューを通じて寺山を語る、貴重な資料となっている)。この頃(50年代末～60年代後半)に関しては、未発見の資料も多く存在する筈であり、60年代における寺山の活動の正確な把握は、今後の寺山研究の課題となるだろう。

以上本論では、これまでの展覧会、一次資料の再編、雑誌や二次資料などで論じられる様を通して、寺山研究の現在をまとめるとともに、そこから見出せる今後の寺山研究の可能性を論じた。こうした状況の中、本論筆者は、1960年代における寺山の動向を追究する作業を進行中である¹⁶。

没後25年を経て現在に至るまで、さまざまな方面から資料が提出されてきた。定型詩、演劇、映画などの研究も、学会員らの手によって、これからますます多様なアプローチをもって進められていくことだろうが、1960年代の、寺山個人としての活動は、資料整備を含めて、今後進めていかなければならない領野である。「記憶」でなく「記録」から寺山の仕事を見つめることとなりつつ

ある今、混沌としたまま残されてきた1960年代寺山の仕事の整備は、ますます必要となってきたのではないだろうか。

注

- 1 工藤健志「寺山修司の現代性」[『寺山修司 劇場美術館』展カタログ (PARCO 出版、2008)], p.3 及び、筆者による口頭でのインタビューに拠った。
- 2 守安敏久「『寺山修司 劇場美術館 1935-2008』展——没後二十五周年の寺山修司——」[『日本近代文学』第79集 (日本近代文学会、2008.11)] pp.168-171 に、同展の(及び、2008年春の寺山学会)の様子が詳しく記されている。
- 3 これ以前にも書誌は、『寺山修司ワンダーランド』(沖積舎、1983) や、『寺山修司記念館①』(テラヤマ・ワールド、2000) などに、掲載されているが、死後再編されたものも含めている点や、単行本に協力した人物等も載せている点で、『寺山修司 劇場美術館』展カタログは、最も信頼を寄せうる書誌を提供している。
- 4 筆者の把握する限り、2000年の東京を皮切りに、大阪、高知、札幌などで開催された。
- 5 『没後20年 寺山修司の青春時代』展カタログ (世田谷文学館、2003.4)、[『特別展 寺山修司』展カタログ (青森県近代文学館、2003.10)。
- 6 同館作成の資料は以下からダウンロード可能である。
<http://www.plib.net.pref.aomori.jp/top/images/terayama/play.pdf> (2010年2月アクセス)。
- 7 菅野洋人「寺山修司の書物演劇」[『寺山修司 劇場美術館』展カタログ (PARCO 出版、2008)], pp.186-187。
- 8 例えば、『現代詩手帖』11月臨時増刊 (思潮社、1983.11) には、多くのジャンルの専門家が寺山の死に追悼記を載せており、生前いかに多様な交遊を持っていたのかが分かる。
- 9 高取英「寺山作品の謎解きに挑む——清水義和『寺山修司の劇的卓越』について——」(『寺山修司研究』pp.27-29) では、寺山の二次文献を、①思い出の本、②評伝的な本、③論じたもの、④批判するための本の4種に分類しているが、高取氏が「④批判するための本」に分類しているであろう書において初めて明らかにされる伝記的事実も多く、一概に見過ごすことはできない。本論筆者はここで、主に寺山との直接の関わりを中心に論ずる書を「回想記」、証言や資料を元に寺山自身の生を描く書を「評伝」、多数の人々の論文をまとめた寺山ムック本を「概説書」、寺山作品を論ずるものを「研究書」と分類した。
- 10 田中未知『寺山修司と生きて』(新書館、2007.5) には、これまで書かれてきた寺山批判に対する反駁がまとめて論じられている。
- 11 杉山正樹「遊戯の人」[『没後20年 寺山修司の青春時代』展カタログ (世田谷文学館、2003.4)], p.19。
- 12 森崎偏陸「寺山修司の音楽・序章」[『寺山修司研究』創刊号 (文化書房博文社、2007.5)], p.276。
- 13 同論文、p.276。
- 14 寺山修司「あとがき」[『黄金時代』(九芸出版、1978、河出文庫、1993)], p.319。
- 15 小菅麻起子「寺山修司「年譜」をめぐる問題点」[『寺山修司研究』vol.1 (国際寺山修

司学会編、2007) 所収] や、同氏編著による『寺山修司 青春書簡—恩師トクへの75通』(二玄社、2005) などにより、その詳細が明らかにされつつある。

- 16 寺山の1960年代の動向についてまとめたものとして、筆者は「寺山修司1960年代の仕事—そのクロスジャンルの展開」(修士論文、2008年12月提出)を著した。また、この内、1960年代における写真家との仕事をまとめて、「寺山修司・写真前史—中平卓馬、森山大道との競作過程」[『寺山修司研究』第3号(文化書房博文社、2009)所収 pp.170-185]を発表している。

主要参考文献

一次資料

- 寺山修司『誰か故郷を想はざる 自叙伝らしくなく』(芳賀書店、1971/角川文庫、1994)
——『黄金時代 寺山修司評論集』(九芸出版、1978/河出文庫、1993)
——『寺山修司全シナリオ』I-II (フィルムアート社、1993)
——(山田太一編)『ジオノ・飛ばなかった男』(筑摩書房、1994)
——『寺山修司の忘れもの—未刊創作集』(角川春樹事務所、1999)
——(田中未知編)『月蝕書簡 寺山修司未発表歌集』(岩波書店、2008)
——(田中未知編)『写真屋・寺山修司 摩訶不思議なファインダー』(フィルムアート社、2008)

二次資料

- 国際寺山修司学会編『寺山修司研究』創刊号(文化書房博文社、2007)
——『寺山修司研究』第2号(文化書房博文社、2008)
小菅麻起子『寺山修司青春の手紙 拝啓中野トク先生』(寺山修司五月会、1998)
杉山正樹『寺山修司・遊戯の人』(新潮社、2000/河出文庫、2006)
世田谷文学館『没後20年 寺山修司の青春時代』展カタログ(世田谷文学館、2003)
高取英『寺山修司論 創造の魔神』(思潮社、1992)
——『寺山修司 過激なる疾走』(平凡社、2006)
田澤拓也『虚人 寺山修司伝』(文藝春秋、1996/文春文庫、2005)
田中未知『寺山修司と生きて』(新書館、2007)
寺山偏陸(監修)『寺山修司 劇場美術館』展カタログ(青森県立美術館開催、バルコエ
ンタテインメント事業局、2008)
長尾三郎『虚構地獄 寺山修司』(講談社、1997/講談社文庫、2002)
三浦雅士『寺山修司 鏡のなかの言葉』(新書館、1987/[新装版]、1992)